

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】藤井 淳

【所属】(助成決定時)東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】伝教大師最澄・弘法大師空海により請来されたる『三教不斉論』の研究
— 儒教・道教・仏教の比較思想—

【研究の目的】(400字程度)

『三教不斉論』は儒教・道教・仏教の三教の優越を論じ(「三教不斉」とは「三教がひとしくない」という意味)、仏教が最高であることを論じた中国・唐代における論文(前盧州参軍・姚辯撰)である。

『三教不斉論』は天台宗の開祖、伝教大師最澄および真言宗の開祖、弘法大師空海によって日本にもたらされたことは、それぞれ帰国後に朝廷に提出した目録に記載されていたが、その内容は長らく不明とされてきた。しかし、研究者本人により、この『三教不斉論』が東京都立図書館の諸橋轍次文庫に1861年書写の写本として所蔵されていることが判明した。さらにその後、高野山大学密教文化研究所が過去の調査記録を調査したところ、石山寺に最澄請来の1497年書写の写本が所蔵されていることが判明した。

本研究ではこの『三教不斉論』を文献学的研究として校訂・翻刻・訳注研究を行うことを主に、さらに日本において現在に至るまでどのように流伝してきたのかという背景を調査する。

【研究の内容・方法】

本研究は写本に基づいた厳密な文献学的研究を主体とし、また関連する著作との思想的比較を行う。さらに『三教不斉論』の伝持に関連する調査を行う。

『三教不斉論』は現在の所、申請者によって、①最初に確認された1861年に良空によって書写された、千福寺(徳島県阿南市)旧蔵・諸橋文庫本(東京都立図書館蔵)を始めとして、②1850年代の高野山西南院(和歌山県)の写本、③1497年の石山寺(滋賀県大津市)の写本の三本が確認されている。これらのうち、①②のカラー版を入手し、③石山寺の写本は既に白黒の写真版で確認し、朱字が存しないことを確認した。

本研究においては、第一には、これら三つの写本をもとにして異読箇所を確認し、翻刻として発表する。

『三教不斉論』は唐代における中国の文献であり、仏教学・中国学の方法に基づいた研究が必須である。研究者本人は仏教学・中国学の知識をもとに『三教不斉論』の出典(引用文献)を調査する。

このような佚文や引用文献の調査により、原文が判読しにくい箇所をより厳密に明らかにすることができる。これらの作業によって、姚辯撰の『三教不斉論』のテキストを確定した上で、翻刻および注釈・出典注記を加えた訳注・現代語訳を高野山大学密教文化研究所主催で行っている。

また石山寺本の奥書によると、伝教大師最澄は台州龍興寺において『三教不斉論』を書写し、その後、越州において『三教不斉論』を『越州録』という請来目録に記載したことが分かる。台州龍興寺はその後荒廃して所在が実際は不明であるが、現在は一応の確認がなされている。今回の奥書によると龍興寺には現在まで知られていた「西廂浄土院」の他に「北房」があったことが分かる。さらに弘法大師空海は、最澄が滞在した約一年後に同じ越州に立ち寄り、「三教」の文献を書写してもらうことを現地の長官に宛てて要請している(書簡は『性霊集』に所載されている)。本研究では継続して現地調査を行っていく。

【結論・考察】

研究者は二〇一一年四月より教員職に就職したこともあり、中国越州また徳島県での現地調査は行えなかったが、国内で高野山大学密教文化研究所の協力を得ながら『三教不斉論』の翻刻を明らかにし、さらに訳注研究を行っている。

本研究によって中国唐代の三教交渉論の貴重な文献を学界に紹介することができ、仏教学・中国学に対して多大な貢献することができたと考えている。また『三教不斉論』が最澄・空海によって請来されて以来、江

戸末期まで流伝した経緯について考察を加えた。この考察は仏教文献の日本における流伝を考える上でも重要な貢献と考える。

石山寺本の奥書について、中古天台の文献を考慮に入れながら、その信憑性の確かさについて確認した。また調査の過程で最澄の将来目録の古写本を見出すことができ、最澄の中国での仏典の蒐集状況と目録の作成について新たな知見から考察することができるなどの進展を見せた。また比叡山の経蔵において『三教不斉論』が置かれていた場所についても古い目録から推定した。

